

しいたけ栽培に取り組む夫婦

—新しき村—

宮崎県木城町と、毛呂山町との友情都市盟約を記念して、新しき村に暮らす人びとを特集する2回目。今回は、しいたけ栽培を担当している寺島洋(66)さん、寺島美穂(56)さんご夫婦に話をうかがった。

寺島洋さんは、東京都文京区に住んでいるときに、武者小路実篤の本と出逢い、東京で主催された木曜会という勉強会に参加したり、休日訪村などを経て21歳で入村した。自然観察や読書が好きで、新しき村の機関紙にも投稿しているとゆっくりとした口調で話す。妻の美穂さんは北海道出身で、親の転勤で長野県に住んでいたころ、実篤先生の本を読んで新しき村のことを知り、入村を決めたと少し照れながら話してくれた。

洋さんが入村した当時は、養鶏が盛んに行われていて、新しき村では木を伐採し、鶏舎を次つぎと建設していた。洋さんは、伐採した木を利用して、趣味でしいたけ栽培を始めた。当初は100本程度で、村内で消費できる量だったが、村内にあった幼稚園の父母から、売ってほしいという話が来て販売を始めた。その後、農協などに販売できるようになった。現在では、1万5000本の

の原木を栽培している。

毛呂山町の特産品として有名な新しき村のしいたけだが、はじめは、栽培方法もわからず、手探り状態だったという。建物の中で温度管理をしながら、おがくず菌を植え付け、特殊な蛹で蓋をした原木を育て、しいたけ栽培する方法にたどりつき、ようやく特産品と呼べるものを栽培できるようになったという。

しいたけ栽培で、一番楽しい瞬間は、自分が育てた原木から最初のしいたけが顔を出したときである。そして、自分がイメージしたとおり、原木からしいたけが次つぎと出てくるとこれまでの苦労を忘れてしまう。新しき村のしいたけは、肉厚で新鮮なため、消費者からはとても評判が良い。これからも体が続く限り、こだわりのしいたけを作り続けていきたいと語ってくれた。



写真左が寺島洋さん、右が寺島美穂さん

毛呂山歴史教養

文化財シリーズ 183

にがはやしのかつせん  
苦林野合戦

～歴史書に記された中世の合戦～

上野(群馬県)、越後(新潟県)両国の守護職を宇都宮氏綱から取り上げ、憲頭に与えることとしました。これに反発した氏綱の家臣・芳賀禪可は、鎌倉へ上る途中の憲頭を襲撃しようとしたが、察知した基氏は芳賀軍討伐のため、自ら大軍を率いて鎌倉街道を北上しました。そして両軍が対戦したのが苦林野だったのです。貞治2年(1363)6月のことでした。

苦林野合戦のようすは、中世の歴史書『太平記』のなかに詳しく記されています。基氏軍は騎馬3千騎をはじめとする約1万の軍勢、対する芳賀軍は800騎。結局、基氏軍が芳賀軍を破りましたが、現在の狭山市にある堀兼井も赤く染まったと記され、激戦を物語っています。

『太平記絵巻』にも苦林野で勇ましく奮闘する騎馬武者の姿などが描かれています。

※絵巻の写真は歴史民俗資料館で展示公開しています。

毛呂山町東部の玉林寺地区は、隣の坂戸市塚原古墳群と合わせて埼玉県内でも珍しい前方後円墳の密集地帯になっています。そのうちの1基で町指定文化財となっている「苦林古墳」の上には、江戸時代の文化10年(1813)に里人が立てた千手観音の供養塔があります。千手観音の背面には、今から650年ほど前にこの地を舞台に行われた苦林野合戦について刻まれています。

京都に室町幕府を開いた足利尊氏は、関東を統治するために鎌倉に「鎌倉府」を置きました。鎌倉府の長官を鎌倉公方といいますが、初代鎌倉公方は足利尊氏の子の足利基氏です。

足利基氏は、補佐役の関東管領に失脚した畠山国清に代わり上杉憲頭を登用しました。上杉憲頭は、一時尊氏に叛いたため、信濃国に追放されていた人物です。

基氏は、関東管領の職だけでなく



江戸時代に立てられた  
苦林野合戦供養塔